

**日本看護歴史学会**  
**会報**

日本看護歴史学会  
第 15 号  
1993 年 5 月 31 日

### 医制一二〇年「産婆制度を考える」

— 現行看護教育制度と

助産婦教育カリキュラムの動向 —

高橋 みや子

第七回大会のテーマは、医制一二〇年「産婆制度を考える」です。大会に先立ち、現行看護教育制度と助産婦教育カリキュラムの動向を簡単に紹介し、問題提起をかねたいと思います。

専修学校設置規程（昭和五一年一月一〇日）の公布以来、看護教育（保助看含む）は殆ど学校教育法第八二条の専修学校で行われてきました。しかし、ここ数年來、急速な変革をとげつつあります。学校教育法第一条の学校である四年制大学や短期大学が増加し、第八二条の専修学校中、専門課程を有する専門学校は短期大学へ移行する傾向にあり、同様に高等課程を有する高等専修学校は専門

学校へ移行するか、廃止される傾向にあり激減の途を辿っています。看護教育が学校教育法第八二条の専修学校から第一条の学校に移行する事は、学校教育制度上、学校教育の傍系から正系へ移行する事を意味します。ここで、看護教育がやっと正規の教育ルートに乗ったあるいは他領域と同じ基盤に立ったと言えます。この様な看護教育制度の一大変革期にあたり、助産婦教育を看護教育制度上どう位置づけるのかに關して、看護界では白熱した論議が交わされています。

まず、助産婦の名称に關しては、助産婦の名称を残すという意見と保助看を統合して一本化しひとつ

の名称にするという意見と、二通りの見解が出されています。これらの見解と深く関連して、助産婦教育についての考え方は、二通りに分けられます。ひとつは、助産婦は医療法で規定された助産所開設の許可を得られる職業であるから、それを遂行できる能力をもった助産婦の育成を行うと、助産婦の職業教育に焦点を当てた教育観であり、他方は看護学の一領域である母性看護学領域のスペシャリスト・専門看護婦の育成を行うと、学問としての看護学の専門看護婦教育に焦点を当てた教育観であります。これ等の教育観に基づき教育カリキュラムを構築するに際して、看護教育制度の中に助産婦教育カリキュラムをどう位置づけるかについて様々な検討がなされ、展開されています。

ひとつは、四年制看護系大学の看護基礎教育カリキュラムで行われている方法です。保助看学校養成所指定規則第六條（助産婦学校養成所の指定規程）の別表二 助産婦教育課程を読み替えて、四年間一貫の統合カリキュラムの中で展開し、どうしても読み替えのできない科目および実習に關してのみ母性看護学の選択科目として位置づけられています。

次は、看護婦有資格の学生を対象に、短期大学専攻科および専修学校等の独立した教育機関で行われている方法です。保助看学校養成所指定規則第六條の別表二 助産婦教育課程をほぼ完全に遵守した形の六カ月〜一年間の助産婦教育カリキュラムで、看護基礎教育に積み重ねる教育として位置づけられています。

さらに、大学院修士課程あるいは暫定的措置として大学専攻科で行われる方法があります。医療法で定められた助産婦の開業権を重視し、その教育水準として、米国におけるナースプラクティショナーと同程度位置づけと教育カリキュラムが望ましいとされています。この方法は、学士の看護婦が増加している現在、実施可能なカリキュラムとして検討され、一部の教育機関で実施され始めています。

現在、助産婦の名称・看護教育制度上の位置づけ・教育カリキュラム等をめぐって論議がなされていますが、往々にして感情論に移行し勝ちです。産婆は歴史が長い職業です。職業的発達過程や教育制度成立過程等について歴史を繙き、自己の歴史認識を明確にして思考基盤を確かなものにした上で、論議する必要があると思われま

# 第七回日本看護歴史学会大会開催日程

## 「医制一二〇年・産婆制度を考える」

開催期日

八月二十八日(土)、二十九日(日)

会場

神戸市勤労会館

神戸市中央区雲井通五―一―二

☎〇七八―三三―一八八一

参加費(両日共通・当日払い)

会員二千円、非会員三千円

※会員証を必ず携行して下さい。

開催日程

第一日目(8月28日)

13時〜 開場・受付開始

14時〜14時30分

「医制公布以後の産婆制度成立過程について」 高橋みや子氏

14時40分〜16時10分 記念講演

「お産の変遷を調査して

―その方法論を省みる―

女性問題研究者 大林道子氏

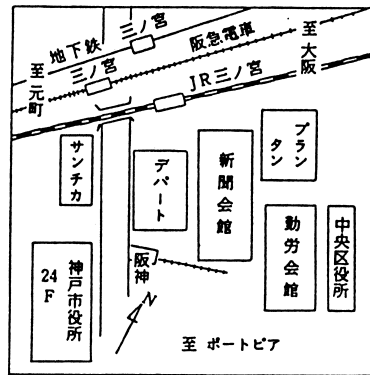
※大林氏の著書『助産婦の戦後』

勁草書房(山川菊栄賞受賞)を

御参照下さい。

16時20分〜17時 第七回総会

会場付近見取図



※新幹線新神戸駅からは、地下鉄で三ノ宮下車して下さい。

第二日目(8月29日)

10時〜10時50分

研究発表 司会 玄田公子氏

11時〜12時 特別講演

「緒方洪庵と適塾(仮)」

仏教大学教授 梅溪昇氏

12時〜13時

サンドイッチパーティ(千円)

13時〜16時

分科会 担当 五十嵐節氏

16時〜16時30分

分科会報告(各グループ)

16時30分 閉会

### ◆ 研究発表の募集要領について

本会第七回大会の研究報告を募集いたします。発表を希望される方は、次の要領で応募して下さい。応募要領

1. 研究報告のテーマ(看護史に關するものなら可)
2. 報告の要旨(研究の目的、研究の主題をとりまく状況、研究史、研究結果等の概要を四〇〇字詰原稿用紙縦書二〜三枚にまとめたもの)
3. 締切日 六月三〇日(当日消印有効)
4. 宛 先

615 京都市右京区西院月双町111

マンハイム五条309号 亀山方

日本看護歴史学会事務局

※研究発表申し込みと朱書のこと。

### ◆ 参加申し込み方法

参加希望者は往復ハガキに会員番号(非会員の場合はその旨、記入して下さい)、氏名、住所、参加日、二日目のサンドイッチパーティの参加の是非を記入し、八月二〇日までに事務局宛にお送り下さい。近年、参加の是非が把握できず、準備に手間取っています。

### ◆ 分科会話題提供者の募集

本会では会員の自由な分科会活動を推進するために大会期間中に交流の場を準備しております。今回の大会の話題提供者になつて下さる方を募集します。応募される方は、次の要領で分科会担当者の五十嵐節氏宛に御連絡下さい。

1. 研究テーマと要旨(二〇〇字詰原稿用紙一枚以内)
2. 締切日 六月三〇日
3. 宛 先

151 東京都渋谷区代々木四―二六―九―四〇九 五十嵐節氏方

### ◆ 新幹事の顔ぶれ決まる

先に行われた幹事選挙の結果、左記の方々が幹事就任を承諾されました。尚、新幹事の就任は第七回総会の場で承認されたときに決定されます。

五十嵐節氏、鶴沢陽子氏、大平政子氏、岡山寧子氏、亀山美知子氏(留)、草刈淳子氏、玄田公子氏、高田節子氏、高橋みや子氏(留)、依田和美氏(留) 以上一〇名

今、あらためて

### 助産婦の役割を問う

小山田 信子

助産婦の役割とは何だろう。初めてそう疑問を感じたのは三交代で大病院の分娩部で勤務していたころである。今やっていることは、確かに助産の一部ではあるが、これでいいのだろうか……。

そんな時、戦前戦中戦後開業助産婦として活躍なさった方々に直接お話を伺う機会に恵まれた。島一春の『産小屋の女たち』（健友社）のような内容を活字ではなく生の声で聞くことができた。次から次とまさに寝食を忘れての活動ぶりに、ただただ感嘆するばかりであった。自分の生活はさておき、損得抜きで命の誕生を見守ってこられていた。自分の生活を犠牲にすることが美德だ、と言っているのではなく、助産活動に専念した結果としてそうなっていたということである。妊産婦にとって、また彼女らを支える家族、地域住民らにとってどれほど心強いことであつたらうか。住民の感謝の気持ち、石碑建立という形にも表われており、もっと前の時代の助産婦の功德碑が宮城県のいくつかの

田園地帯でみつかっている。

話の中で共通していたのは、「なるべく産婦のそばについて呼吸のしかたや怒責の方法を話すなどして不安をなくさせるよう心を配った。」ということである。これは、midwifeは産婦と共に、という意味（キャロリンフリント、きめこまやかな助産婦の仕事）に通じる。時代が違つてしまえばおしまいだが、普通りの行動ではなく、その行動の源になつた心を甦らせたい。

助産婦が産婦に適したケアを実行できる体制を、千葉大のように組織レベルでとりかかれることが望ましいが、その原動力となつたのはやはり個々の意識である。日本看護協会調査研究会の「病院勤務助産婦の業務と役割に関する調査」から、産婦の方々のお産に對して不満と答えた理由をみると、陣痛の時に誰もいなかった、つらかった、自分の希望のお産ではなかった、お産の時叱られた等であった。これらの内容を真摯に受けとめ、今一度助産婦の役割とは問うてみたい、仲間と考えてみたい。妊産婦に地域住民に慕われた輝しい業績の先輩助産婦と同じ「助産婦」を名乗るのを恥じないように。

### 医制一二〇年に思う

豊田 淑恵

今年が医制一二〇年とのことで驚きと同時に、歴史の重さを感じる。私の知る限りの医師は、時代に登場する赤ひげ先生だが、彼はいったいいつの時代の人であつたのか。医者として庶民に慕われていたので江戸時代末の人物であつたのであろう。彼は、庶民から尊敬され、腕の良い医者である反面人情に弱く、酒に強い、今ふうに云えば成熟した、自立した人間であつたと思う。この時代は医は仁術であり、赤ひげ先生のような人が大勢いたものと察する。

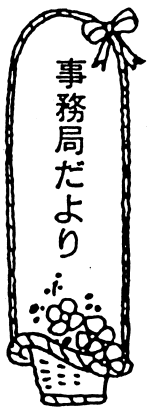
この赤ひげに匹敵していた人間が産婆であつたと思う。明治32年七月一九日産婆規則が公布されているが、それ以前にも地域の住民ことに庶民の中で陰の力となつていたと思われる。それは、瀬川清子著『女の民俗誌』の中に、「今日から一世紀前、明治維新になつて女性が出産、月事の忌屋の生活から解放されたとき……」と書かれている。女性が出産をすること、月経があることは「けがれ」とされていた時代、さらに、女性の社会

的地位が認められていない時代においても、産婆の前身が活躍していたと思われる。

私の身近にも、現在86歳で保育所を営み、年に一〜二回の分娩介助と産後の健診まで自転車に乗って実践していらっしゃる鎌倉在住の丸エキ先生を存知している。

丸先生は、明治40年に東京でお生まれになった。先生が助産婦になる動機は、近所で活躍していた産婆の姿をみて、女性として自立できる職業、社会から認められる職業と考え、昭和六年に慶応大学附属助産婦養成所に入學された。昭和六年には、まだ、助産婦養成所としての名称が確立していたのか調べてないが、史料からは、昭和一七年の国民医療法公布となるまでは、産婆学校あるいは産婆講習所だったのでないかと思う。しかし、丸先生御自身が産婆でなく助産婦としての名称で今日まで一万人の赤ちゃんと母親、そして、その家族を取りまく周囲の人々とのかわりがあつた事実があり、女性としての社会的地位も高く評価され市議会議員にも当選されている実績がある。

今後、諸先輩達の足跡をいかに発展させるかが、私たちの課題だ。



◆ 会員の異動

- 江崎フサ子↓870大分市長浜町一  
一―一三―七二三(大分大学教  
育学研究科修士課程へ)
- 久米栄代↓870大分市明野高尾三  
一―一三―八
- 高橋富士子↓522彦根市和田町二  
二七―一八(滋賀県立短期大学  
看護学科へ)
- 高橋みや子(980-23山形市飯田西二  
一―二六―二〇四(山形大学医  
学部看護学科へ)
- 花岡真佐子↓062札幌市豊平区平岸  
三条八丁目三一―一五〇三(東  
日本学園大学看護福祉部看護学  
科へ)
- 山本捷子↓自宅住所は従前どおり  
(日本赤十字秋田短期大学開設  
準備室へ)
- 秋山 智↓204清瀬市梅園一―一七  
国立療養所東京病院附属看護専  
門学校へ)
- 玄田公子↓自宅住所は従前どおり  
(京都府立医療技術短期大学へ)
- ◆ 新入会員
- 三木喜美子 350-04埼玉県入間郡毛

- 呂山町毛呂本郷三八 埼玉医科  
大学短期大学
- 西田直子 602京都市上京区河原町  
広小路上ル 京都府立医大医療  
技術短期大学部
- 齊本文子 651-01神戸市西区枝吉一  
一六 みどり病院

※住所変更等は必ず事務局へ

看護史一口メモ ④

明治末の「婦人世界」第五巻第  
一三号には「日本一の若い産婆」  
というタイトルで村田阿栗子が満  
一六歳で産婆試験に合格したとい  
う取材記事が載せられている。村  
田は代々佐賀藩の御殿医の家に生  
まれたが、父親が死んだため女学  
校二年で中退。上京して神田区に  
あった日本産婆看護婦学校(一年  
制)に在籍中に東京府庁の実施し  
た試験を受けたものだった。  
試験はまず学科試験が一日二問  
ずつ三日間行われ、二〇日後に合  
格通知を受けた後、半年後に実施  
試験で実際に妊婦を診断し、続け  
て模型で内診、分娩介助等を行っ  
たという。(か)

◆ 三年以上会費未納者

次の方は至急同封の振込用紙で  
会費(一九九二年度までは年会費  
三千円)を振込んで下さい。三年  
以上滞納されますと、本会会員の  
資格を失いますので御注意下さい。  
氏名の下の( )欄は滞納年数。

- |                  |          |        |
|------------------|----------|--------|
| 氏名 (一九九三・四・二六現在) | 氏名 (年)   | 氏名 (年) |
| 本田 五女(3)         | 徳田千恵子(4) |        |
| 上野ミユキ(3)         | 遠藤恵美子(3) |        |
| 中村 明美(4)         | 山中 公子(3) |        |
| 須藤 知子(4)         | 小林 尚子(5) |        |
| 諸家香代子(3)         | 近藤 麻理(5) |        |
| 錦織由紀子(5)         | 石沢 信人(3) |        |
| 宮田 茂子(3)         | 雨宮 禮子(4) |        |
| 菊地 トヨ(5)         | 西村サエ子(3) |        |
| 田中 治美(5)         | 村山 惟子(3) |        |
| 高浜 英子(4)         | 加藤 光宝(3) |        |
| 荻野 英美(4)         | 平野 幸子(5) |        |
| 松井美知子(5)         | 芝田香代子(5) |        |
| 浦野 シマ(4)         | 市橋 恵子(4) |        |
| 村上カツミ(3)         | 山根 久子(5) |        |
| 吉崎 弘之(4)         | 田辺 光子(3) |        |
| 上條 美昭(3)         | 坂田美喜子(4) |        |
| 難波 茂美(5)         | 中嶋八重子(4) |        |
| 能瀬 敬子(5)         | 平山 厚子(4) |        |
| 米沢 隆道(5)         | 末永ちち代(4) |        |
| 白川 康一(4)         | 中条 桂子(4) |        |
| 焼山 和憲(5)         | 深沢佳代子(3) |        |
| 飯島美代子(4)         | 橋岡由美子(3) |        |

◆ 産婆一〇〇年記念テレカ

本会ではこれまでに看護婦百年  
保健婦五〇年の記念テレカを発行  
しましたが、今年が産婆一〇〇年  
に当たることを記念してテレカを  
発売いたします(五〇度数 八百  
円)。お問い合わせは事務局までハ  
ガキでどうぞ。  
(第七回大会会場でも販売予定)

◆ 編集後記

今回は産婆特集号となった。少  
産化の中にあつて、助産婦の今後  
を模索するためにも温故知新は必  
至であろう。今、産婆こそが新し  
いのでは？ (か)

日本看護歴史学会

会報第一五号

(頒価 二〇〇円)

発行責任者

558 大阪市住吉区帝塚山東二―一―

四一 大阪府立看護短期大学内

依田 和美

編集責任者

亀山美知子

日本看護歴史学会事務局

615 京都市右京区西院月双町一―一

マンハイム五条三〇九

亀山方